

2020年9月期
関西大学審査学位論文

清代中国篆書書法と東アジア
—江戸時代の日本への影響と展開を中心に—

論文要旨

関西大学大学院
東アジア文化研究科

曹悦

中国篆書書法の発展の歴史には紆余曲折がある。秦の始皇帝による文字書体の統一以降、書体が進化し、歴史の移り変わりに伴い、実用性の需要が高まり、篆書による書体が実用的でなかったために、篆書は日増しに衰退した。しかし、唐代と清代に2つの大規模な篆書復興思潮が見られ、その影響力が再び増した。清代は唐代の後に続いて篆書復興のもう一つのピークであった。清代に見られた石碑等から採取した拓本などに依拠する碑学に対する関心の高まりの中で、篆書が復興した理由については、碑学研究が興ることに伴って碑学理論が提示されたことも一つの重要な根拠である。その間に多くの篆書に関連する書家と学者が現れた。篆書書家の一部は伝統を継承し、一部の書家はその学風や特殊な文化の教養をもとに、独特の篆書スタイルを創作した。例えば著名な書法で知られる王澐（1668-1743）や清朝考証学の孫星衍（1753-1818）などの書家等は、清朝の学問復古の基礎のもとに、篆書書法の発展に新たな活力を注入し、当時の中国文化に深い影響を与えた。この影響は中国に止まらず、江戸時代の日本や朝鮮王朝の篆書書法にも大きな影響を与えたのである。

江戸時代以前には、篆書で書法を書く人は少なく、装飾に使われることが多かった。江戸時代の日本と中国は、中国から長崎への貿易船による海上貿易が頻繁に行われ、仏教文化などの交流も盛んであり、中国の商人、僧侶などが唐船に搭乗して日本に到り、物資や文化なども日本が受け入れることになった。中国書法の日本での浸透拡大は、主に中国風の影響を受けて、六朝本、楷書、行書などが一世を風靡し、篆書はある意味で未知の書法であったが、日本の書家たちが、清朝篆書法を受容するとともに再興することで、日本篆書書法の発展に大きな影響を与えた。日本では、徳川家康が創始した江戸幕府は、その文教政策の推進によって、書法の革新風潮が勃興し、中国流の唐様と日本の伝統的な和様が現れた。

江戸時代には、「御家流」から一般的な庶民の学書を設けた教育機関「寺子屋」まで、書道芸術は上流階層から庶民階層にいたるまで普及していた。これによって、唐様書道は、後代の日本の書道の発展の中で、徐々に主導的な地位を占めることになる。日本の江戸時代はちょうど中国の清代にあたるが、篆書が復興し、文人と学者の両方の視野に包含されることで、適切な継承と伝播を成し遂げた。唐様書道の一部として、篆書は弁識度が低く、実用性が弱いという特徴があるが、それにも拘わらず、江戸時代から本格的な発展を遂げてきた。

当時、唐船で日本に大量に運ばれていた書籍の中には、模写学習のための手本類、文字を研究する字書類、理論研究のための書論があり、唐船を通じて中国の篆書書法がよく日本に伝わってきたと考えられる。

そして、江戸時代には国内交通が発達し、江戸や大坂などで出版された書籍が各地に流布し、書家、学者との交流も頻繁となり、同時に書道は庶民層にも広く伝播し、書法の習得に便宜を与える機会を助長した。当時の日本では、唐様書道の習得が増したため、書体に関する多くの書籍が発行された。

清代は、中国の書道史上非常に重要な時代であり、書法の発展体系が整備され、各書体の発展が盛んになり、一方は海上から日本に伝播し、他方は陸上から朝鮮に伝播した。この文化活動によって各国の文化交流がもたらされ、清代の文化は、日本や朝鮮に伝播し、その影響は深遠であった。当時の朝鮮王朝は、清の文化と密接に交流し、朝貢と冊封の関係を維持し、燕行使を中国に派遣して交流し、中国の思想文化の影響を受けた。そうした状況の報告としては、朝鮮王朝の承政院の日記が遺存しており、そこにはいろいろな篆書書法に関する資料が含まれている。

書法は中国の伝統的な芸術であって、篆書、隸書、草書、楷書、行書などの書体を包

括するが、現在の中国書法の研究は、中国書法芸術史論の研究にとどまっている。例えば篆書書法の研究は、芸術面から中国歴代の有名な書家の作品を一例として分析し、書家やその時代の書風を研究することが中心である。しかし、中国書法は国外に大きな影響を与え、特に東アジア世界の日本の書道や韓国の書芸にその影響が見られる。中国書法の基礎を継承して、日本や韓国において、それぞれ書道と書芸が形成されて、自国の書家や書風が確立された。

【各章の概要】

本研究は三部に分けれ、第一部は「中国と日本の篆書書法について」の三章で、第二部は「江戸時代における篆書書法の受容状況について」の四章、そして第三部の「中国と朝鮮王朝の篆書書法について」からなる。第一部は、中国と日本の篆書書法の状況を紹介し、本文の研究背景とする。第二部は、江戸時代における篆書書法の受容状況の内容に基礎を定める。第二部は文献面と芸術面から清代篆書書法が、江戸時代の日本にどのように影響したかを究明する。第三部は、朝鮮王朝の篆書書論と作品を分析し、清代中国篆書書法が東アジア地域に与えた影響の補遺である。

第一部 中国と日本の篆書書法について

第一章 中国篆書書法の発展について

中国篆書書法の発展の歴史には紆余曲折がある。秦の始皇帝による文字書体の統一以降、書体が進化し、歴史の移り変わりに伴い、実用性の需要が高まったが、篆書による書体の地位が実用的でなかったために日増しに衰退した。しかし、唐代と清代に2つの大規模な篆書復興思潮が見られ、その影響力が再び増した。その間に多くの篆書に関連する書家と学者が現れた。篆書書家の一部は、伝統を継承し、一部の書家は、その学風や特殊な文化の教養をもとに、独特の篆書スタイルを創作した。清朝の学問復古は、篆書書法の発展に新たな活力を注入し、当時の中国文化に深い影響を与えた。同時に書家と学者の書論は多く、篆書の内容も少なくない。清代中国の代表的な篆書書論を分析し、書論の内容の多くが古を中心にして、古人の經典を勉強することを提唱し、また、篆書を教えるための理論もある。思想的には、大いに研究がなされたにも拘わらず、篆書は清代に大きな復興と普及を可能とし、篆書の発展を継承して、篆書書法史において完備されている体系を形成するために補充を提供した。中国の篆書書法の発展状況を詳しく紹介し、同時期の江戸日本と朝鮮王朝の研究に基礎を定めた。

第二章 日本篆書書法の発展について

書法は、東洋において非常に重要な芸術の一つであり、その源は中国である。日本は、中国に続いて書法の重要な構成部分となり、中国の書法の影響を自然に受けている。中国における王朝の交替と、日中の頻繁な交流状況に従って、日本の書法の発展は飛鳥時代に遡る。日本は、留学生や僧侶を大量に派遣し、交流を通じて書法芸術を日本に持ち帰った。篆書書法は、各書体の中で最も識別しにくいものとして、奈良時代の「鳥毛篆書屏風六扇」から装飾の芸術として多くの人々の視野に入るようになった。その後も篆書書法で書く者はとても少なく、碑額や匾額などに多く使われている。篆書書法は、江戸時代になって、本格的な発展を遂げた。江戸時代における日本と中国との長崎貿易は、頻繁に行われたので、仏教やその他の文化交流も盛んになり、商人、僧侶などが唐船に搭乗して日本に到り、物産や文化などが日本に流入し普及した。篆書は、最初の装飾性から発展した後、完全な篆書書法理論を形成し、それによって日本で普及が進んで受け入れられた。第二部江戸時

代の篆書書法の受容状況に研究背景を提供する。

第三章 江戸時代における日本篆書書法の書目

江戸時代には鎖国政策があり、長崎港だけを開港して中国と貿易をした。当時はほとんどの篆書書法に関する資料は、舶載貿易を通じて日本に輸入されたと推測される。本論文の研究対象は、江戸時代に中国から日本に輸入された篆書書法に関する資料で、舶載貿易にどのような篆書資料が日本に入って来たのかを整理することを目的とし、その内容を表に作成し、さらに日本時代の篆書書法の普及状況を探ることである。そして、江戸時代には国内交通が発達し、江戸や大坂などで出版された書籍が各地に流布し、書家、学者との交流も頻繁となり、書道は庶民層に広く伝播し、書法の習得に便宜を与える機会を助けた。当時の日本では、唐様書道が漢字の書体を吸収して展開したため、書体に関する多くの書籍が発行された。本章は、以上の二つの内容を中心に、江戸時代における日本篆書書法の書目に関する資料を紹介して研究を深めたい。要するに、江戸時代の日本では、単に篆書書体を習得すると言うことに止まらず、篆書を学術的に論じると言う篆書書論の出現を見たのである。江戸時代の篆書書目に関する舶載と出版の問題を詳しく述べ、第二部の論述に理論的な根拠を提供する。

第二部 江戸時代における篆書書法の受容状況について

第四章 江戸時代初期における日本と中国の篆書書論（1603年-1700年頃）

江戸時代に唐様書法は、徐々に主導的な地位を占めていった。書論は、書法を研究する時に理論の基礎として、自然に重視され普及され始めた。既述のように、江戸時代の書論は、唐船の舶載、僧侶の交流などによって日本に伝えられ、当時の書家と学者が篆書書法に関する書論を理解し学習し始めた。その後、次第に関連する書籍を出版するようになっていく。しかし、江戸前期の書論は数が少なく、その内容は、主に中国から伝来した書論の再刊行であった。本章は、主に江戸時代の前期に関連する篆書書論をまとめ、当時の書論『説文解字五音韻譜』、『韻府古篆彙選五卷』や『撫古遺文』と中国書論を比較し、当時の中国篆書書論の日本での伝播と受容状況を見る。

第五章 江戸時代中期における日本と中国の篆書書論（1700年頃-1750年頃）

江戸時代の中期中に、いろいろな篆書書法に関する書論が現れたが、一方は篆書を専門に論述したもので、他方は書論の中でも篆書書法に関するものである。本章では、江戸中期の有名な書家松下烏石と澤田東江、そして、記録が少なく無名に近い書家の城戸桓を選んで詳述する。篆書書法を専門に論述した江戸地区で最初に出版された篆書書論「篆説」と、篆書書法に関する書論「書法群碎」と「書譚」を選んだ。分析を通して、異なった書家と異なった種類の書論を見てとることができるが、このことから、日本における中国の篆書書道の学習と受容状況が明らかになる。これを例にして、江戸日本の書論などは、清代の復古書風の影響を受け、日本の書家は中国の書論に基づいて抜粋整理し、自分の考えを持つようになった。中国の篆書書法を受け入れ、次第に自分の理論体系を形成し始めた。そして彼らは、江戸時代後期に独立した書法理論体系を形成するための基礎を打ち立てたのである。

第六章 江戸時代後期における日本と中国の篆書書論（1750年頃-1850年頃）

江戸時代の後期における篆書書法は、舶載、出版などによる伝播を経て、人々に篆書について一定の理解を与えることができた。初期の伝播による継承的な学習から、中期にかけては、自己で独自に考える方向へと進んでいった。江戸時代後期の篆書書論は、初歩的な段階から、日本独自の書論を形成し始めたのである。本章は、江戸時代後期において

最も有名な「幕末三筆」と呼ばれる巻菱湖と市河米庵を選び、それぞれの書論「十体源流」と「米庵墨談」を分析し、中国の篆書書論と比較分析して、この時期における日本の書論と書学思想が、いかにして中国篆書書法を受け入れたかの状況を考察してみたい。篆書書論の発展に続いて、書家たちの見解がいつそう増加したことから、江戸時代の日本における中国篆書の習得と受容状況を明確に理解することができる。

第七章 清代篆書書風の江戸時代日本への影響と展開

芸術面からいうと、江戸時代の日本の篆書書風と中国のそれとの異同を比較検討すると、「文房四神の碑」の碑額でも、「篆説」の内容の字体でも、印章に用いる文字でも、清代中国と同じく、秦代などの最も伝統的な篆書書法を研究しているといつてよい。すなわち、日本の書風は、中国篆書書風の影響を受け、主要な特徴を継承し、その基礎の上に清代篆書書法の新しい特徴を受容した。それによって、日本独自の江戸文字が生まれ、その中で「角字」が代表的な文字として、中国篆書書法を十分に咀嚼して展開することができたといつてよい。芸術的角度から分析を行って、江戸時代の篆書書風の受け入れ状況を考察する。

第三部 中国と朝鮮王朝の篆書書法について

第八章 中国篆書書法の朝鮮王朝への伝播

清代は、中国の書道史上、非常に重要な時代であり、書道の発展体系が整備され、各書体が盛んに発達し、一方は海上から日本に伝播し、他方は陸上から朝鮮に伝播した。この文化活動によって各国の文化交流がもたらされ、清代の文化は、日本や朝鮮に伝播し、その影響は深遠であった。当時の朝鮮王朝は、清の文化と密接に交流し、朝貢と冊封の関係を維持して、燕行使を中国の燕（北京）に派遣して交流することで、中国の思想や文化の影響を強く受けた。そうした状況の報告として、朝鮮王朝の承政院の日記が遺存しており、そこには様々な篆書書法に関する資料が含まれている。本章は、公的な観点から、朝鮮王朝における燕行使の金正喜を例に挙げて、朝鮮王朝が燕行使を派遣して清代中国と朝鮮王朝の書法交流の過程における役割を担ったことを明らかにする。当時、中国が朝鮮王朝と交流する際に大きな意義を示した燕行使の役割を紹介する。承政院日記を例にとり、政府の立場から朝鮮王朝における篆書書法の地位と受容状況を見る。

第九章 朝鮮王朝における篆書書法の受容状況について

金正喜は、朝鮮王朝の書法史上、重要な人物の一人として、中国で研鑽を積み、阮元たちと深い友情を結んだ。思想も書法も清代中国の影響を受けた。金正喜の入燕の経歴としては、中国の書法の影響を受け、「書訣」を書いたことであろう。清代の程瑤田の「九勢碎事」を正確に引用して整理し、これによって啓発された。清代中国の友人との交流を通じて、程瑤田の書論を手に入れた可能性が高く、自己の考えを取り入れて「書訣」の内容を完成したという例からもわかるように、金正喜の書論思想などは、清代中国の書法の影響を受け、朝鮮王朝の書法史上、いわば里程碑というべき人物となっている。金正喜は、清代の碑学思想の影響を受けて、自己の書法に対する理解を加えて、独創的な書法の風格を形成した。文献面と芸術面の両面から論述し、金阮堂の書論「書訣」と彼の書法作品を例にとり、当時の中国書法に対する受容状況の理解を深める。